この点、茲二、三期間の資産構成の推移を見れば明である。

資金構成表（単位千円）

	七年上期	八年上期	九年上期
払込資本金	一六、七八一	一七、〇六〇	一五、八二九
銀行券	五二、六二〇	四三、一三三	四七、九五四
諸預金	九一、二五二	九〇、三〇三	一〇一、四七二
合計	一六〇、六五三	一五〇、五九六	一六五、二五五
政府借入金	九〇、二九一	八九、三七九	七七、五二四
コールマネー	四、八〇〇	二、五五〇	四、九〇〇
再割引手形	八九、九一〇	六〇、六二八	三六、三七九
合計	二一五、二七六	一七三、六三八	一五七、七五三

即ち、問題の特融借入金は漸減して九年上期には七千七百余万円と八年上期に比較して一千二百万円を激減している。尤も借入金、コールマネーは大分増加しているが、再割引手形は実に二千四百万円を著減しているので結局、八年上期に見られた如く運転資金の半以上を外部負債で賄っていると言う非難は解消する様になっている。

他面、同表に明な様に預金を内地銀行並に増加に転じているが、これも、金融恐慌当時の悪人気が漸く薄れて当行の信用が回復した一証左と見て大過あるまい。

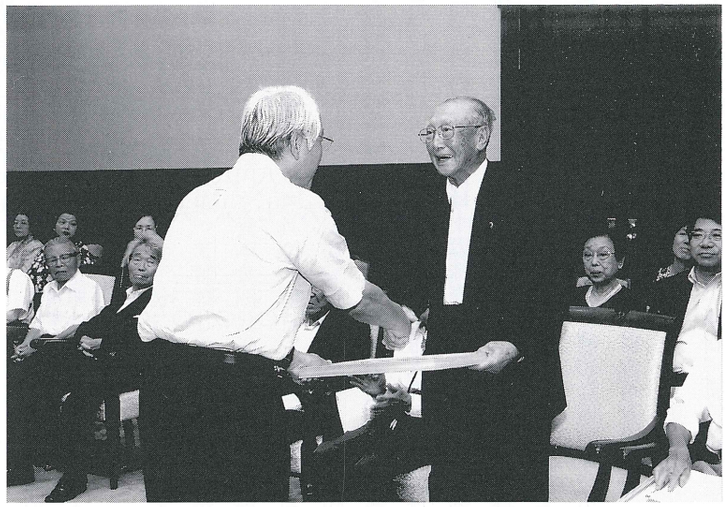
然も、最近は台湾内に於ける各種事業は等しく活況を呈し、新事業の計画されるものあって当行の地位は益々重要性を加えつつあり、資金需要に応ずる為に目下保証準備発行の拡張が議題とされている。

――台湾銀行は鈴木商店の主力銀行であり、当小史に鈴木商店に関連する興味ある文面がありますので転載させていただきました――編集室より

鈴木会長 兵庫県高齢者特別賞を贈られる

鈴木治雄会長は、平成二十年九月三日に九十歳以上の県内在住者で、長年にわたり社会貢献され今も活躍されている人に贈られる「高齢者特別賞」の表彰を受けられました。

写真は、鈴木会長が井戸敏三兵庫県知事より表彰状を授与されているところを神戸新聞に掲載されました。



辰巳会ゆかりの 祥龍寺の歴史（その三）

〈たつみ誌70号よりの続き〉

菅　應峰

江戸末期の荒廃

摂津国本山村宝積寺第八世鹿岳光雄和尚編輯（へんしゅう）による「宝積寺慨史」によれば、宝積寺第三世竹堂和尚が、文化十三年（一八一六年）住職の後、篠原村祥龍寺を兼務住職し、無住荒廃の寺を修繕し寺域を整理したと云う。

堂宇灰燼（かいじん）の後、何時の頃か小庵が再建され、仏像の類も多少はあったのであろうか。

明治五、六年の頃（一八七三年）仏像など大阪西成郡北野村の善通寺に移し、釣鐘も善通寺に渡すよう兵庫県令を通じて申し出があった時、篠原村大西嘉平次、若林嘉茂治、喜寅喜左衛門の連署で、

「この鐘は祥龍寺が寛政十一年（一七九九年）に石屋治左衛門に売り渡された時、村方が代銀一貫三十匁で買取ったもので村方の所有である」と兵庫県令神田孝平に届け出ている書類が若林家にある。

宝積寺光雄和尚の口伝えによれば明治までは宝積寺から弟子の何人かが輪番で祥龍寺を留守していたと云われる。祥龍寺墓地に「天庵篤（とく）宗和尚」の石碑があり、安政三年寂（一八五六年）と刻まれている。竹堂和尚兼務の後、祥龍寺で亡くなった和尚とすれば歴代住職でもなく略歴その他は一切不明である。

古い石碑は現在、次の六基が残っている。

○天庵篤宗和尚　（安政三年寂）
○湛州澄和尚　（年代不明）
○本石浄基和尚　（　〃　）
○徹翁宜参和尚　（　〃　）
○一得浄玄和尚　（　〃　）
○得翁元和尚　（　〃　）

かろうじて名前は判読出来るが、五基の年代はいずれも不詳である。

「西摂大観」に「祥龍寺址・宝塔卵塔数を列ね、中には蒼苔面（そうたいおもて）」に蒸（む）して風雨千古の俤（おもかげ）を留めしものあり」と書留めてある宝塔卵塔は、昭和の再建後、どういうわけか現在の八幡墓地に移され、昭和十三年の水害の折、悉く流出したと云う。これらの墓は若林家のものであるが、中に歴代和尚の墓もあったそうである（乾俊次氏談）。因（ちな）みに祥龍寺唯一の古墨跡（こぼくあと）に、祥龍黙堂の名があるが、年代は不明。

前述の即宗和尚、鉄禅和尚、覚玄和尚、篤宗和尚、湛州澄和尚、浄基和尚、宜参和尚、浄玄和尚、徳翁玄和尚、黙堂和尚はいずれも「禅宗法系譜」に名は無く、今後時期を見て「黄檗宗宗派図」を調べて見たい。

このようにして祥龍寺は荒廃無住のまま、明治維新を迎え、排仏棄釈（はいぶつきしゃく）の波をこうむってやがて完全に廃寺となって、土地まで他人の手に渡ってしまうのである。

碧層軒老師の時代

碧層軒五葉愚渓老師。諱（いみな）は恵忠。安政六年八月十四日豊後国南海部

郡八幡村字戸穴に生まる。十四才同村願成寺にて祝髪、美濃国伊深村正眼寺、名古屋徳源寺、更に神戸祥福寺僧堂を遍歴して実参実証遂にその蘊奥を盡し明治四十年十月、神戸祥福寺住職となる。

大正十三年五月大本山に入寺開堂をなして、妙心寺第五百五十一世として第一座の位に登り妙心寺派管長に就任。翌十四年五月宮中豊明殿にて御陪食の栄を賜う。昭和二年六甲山麓に宝珠山祥龍寺を再興し、自ら中興開山となる。昭和十九年三月奄然として遷化、寿八十六才。

碧層軒老師が、祥龍寺を再建しようとされたのは、大正十二年の春の事で、妙心寺派管長就任の前年である。

偶々摩耶山下に尋常ならざる石垣の残存せるを以って其の由緒を稽査するに、昔の広国山祥龍寺の遺蹟を発見、老師はかねてより寺門を代表して世俗の仏事法要に任ずべき一院の建立を感ずること久しく、この奇縁によって計らずも、時と人を得、明治の廃寺以来五十有余年にして祥龍寺再興の機運が熟したのである。

因みに「祥福寺別院建設主意書」に残る建設勧進主唱者の名をあげてみる。

（イロハ順）

生島五郎兵衛	石田勝作
神田兵右衛門	新田茂兵衛
嘉納治郎右衛門	田村市郎
武岡豊太	鳴瀧幸恭
直木政之介	宇田眞譲
小野嘉六	深澤富太郎
山根重兵衛	小寺謙吉
後藤利彦	有馬市太郎
荒木伊久太郎	貞永省三
北田広吉	島田龍逸
森本隈太郎	鈴木岩治郎

まさに神戸政界財界を網羅した感がある。更に寄進者の中から著名なものを記すと、

鈴木よね	藤井忠兵衛
米澤吉次郎	兼松商店
川勝辰子	澤田善一郎
戸田ふみ	川勝鹿之助
鳥尾和三郎	等の名がある。

鈴木よね女史に関しては次の様な逸話がある。（柳田義一氏談）大正年間、三井、三菱と並んで天下を三分した鈴木商店も実はこの頃は昭和の恐慌で破綻のきざしが見えていた時である。老師の勧進を受けて、よね女史は大番頭金子直吉氏に相談された。すると金子氏は、「実はお家さん（よね女史）の給料がこれだけ留っております」と机の引出しから封の切っていない何年か分の給料袋を出されたそうである。当時二万円と云うと、現在どの位の価値であろうか。

老師の勧進の仕方は、相手の家に行かれても口の中で、もぞもぞ何か云われるだけで、はっきり意味がわからない。しかたなしに隠侍の雲水がそばから口を出して用件を伝えるという具合だったらしい。それでこれだけの賛助のあった事は、まったく老師の人徳というより外はない。

大工は兵庫の橋本と云う棟梁で、老師の居られた祥福寺関係の棟梁であった。祥龍寺が祥福寺を一まわり小さくしたそっくりの設計になっているのも面白い。

土地を寄進したのは深沢富太郎氏である。それまでここに村の土俵があったらしい。明治の中頃までお宮さんの祭りに、相撲大会が盛んだったという。

村の古老乾俊次氏は若い頃、祥龍寺再建の工事を手伝った人であるが、基礎工事の時、大きな松の木を何本か切り倒して地ならしをし、鬼瓦を担ぎ上げた時の事など語ってくれる。又、老師に頼まれて祥福寺から老師の持仏を担いで来たそうである。乾俊次氏の話の中に次の俗謡がある。

篠原だんごの教専寺
八幡きょろきょろ梅仙寺
上野かさかきがんしょう寺
くうやくわずの祥龍寺

荒廃の時代の祥龍寺の有様がしのばれる。

灘区役所広報相談課の発行になる「灘区の町名」という小冊子に次の里謡をのせている。

篠原すぎたるなんじゃいな
しのわらすぎたる寺三軒

寺三軒とは、祥龍寺、慶隆寺、教専寺である。

完成の時、篠原地区から新たに栗林耕平氏を総代として三十軒が檀家に組入れられ、ここに宝珠山と山号を変えた祥龍寺が発足したのである。

大正十五年六月、六甲村篠原地区の区画整理の地図がある（大利新太郎氏所有）。昔の区画の上に赤線で現在の新しい道路が書き入れられているのでわかりやすいが、大庄屋大利家の外には祥龍寺の周りは家が一軒もなく、まったく山の中である。土地の人は山の寺と呼び、後の山で狐が鳴き、前の川では火の魂がとんでいたそうだ。

完成後まもなく、例の祥龍寺の古鐘を、篠原村字小川の教専寺から返還の話がまとまり、昭和八年一月、鐘楼門も出来て目出度く還元式が行なわれた。新装なった祥龍寺に「土地の風光絶佳なると相俟って、四時杖を引く者多し」と云う。祥福寺の旧随老尊宿の多くが、この頃の祥龍寺に足を運んでおられる。

土地の古老からよく聞く話の中に観艦式がある。昭和五年十月二十六日、神戸沖で行なわれた観艦式には、百六十五隻の艦船、七十二基の飛行機が参列、御召艦が各艦船附近を御通過の時には、満艦飾をほどこし、乗員は登舷禮式を以って迎え、二十一発の皇禮砲が鳴り響いたのである。この時、祥龍寺に村の者ほとんどが集って石垣の前に足場を組んで見物した。

この頃、碧層軒老師の提唱参禅会も盛大に行なわれ、再興なった祥龍寺の意気軒昂たる様子が、写真からも感じられる。

しかし間もなく昭和十二年、支那事変勃発、時代は騒然たる雲行きとなり、修行の雲水も次第に少なくなった、碧層軒老師の静かな晩年がおとずれる。この時期、老師に仕えたのが宗信和尚である。

遷化は昭和十九年三月二十八日、二週間位前から薬は一切用いられず、医者が注射しようとすると、「わしの往生を邪魔するな。」と叱られたそうである。